

駒の館だより

明治鍼灸大学図書館報

第 7 号

昭和63年3月31日 発行

明治鍼灸大学附属図書館

〒629-03 京都府船井郡日吉町
TEL. 07717-2-1181 (代)

動の中の静・静の中の動

図書館長 中 村 清

私達は激しく活動している社会に生きています。平和で安定した生活を享受しているのも本当ですが、少なくとも情報に関しては世界中大変忙しい競争状態にあります。ちょっとボタンを押しただけで、買い物案内から専門的情報にいたるまで、おびただしい量のデータが溢れ出てくる、といった感じです。しかし日本の新聞や雑誌は今日なおテレビの普及率を抑えて、発行部数では世界一の規模で最新の資料や知識を提供してくれています。より速く、より詳しく、より多く、というマスコミの競争に、コンピュータを駆使するマスメディアの躍進が拍車をかけています。それは、現代的生活を送り時代にふさわしく仕事をしようと思うならたくさんの情報を必要とするようになってきていることを示しているものでしょう。とはいえ、大切なのはその中で何を選択し何を活用するかということです。情報というものは、利用しなければそれだけのものに過ぎず、中には確かに一定の範囲の人々以外には関係のないものもたくさんありますが、有効に用いれば活動につながる可能性を秘めたものも数多くあります。うわべに惑わされず、冷静にその価値を見極めて利用すれば、内面的にも外面的にも生活を豊かにしてくれます。

若者は本を読まない、というのは本当でしょうか。人口比で見ると、日本の書籍出版数は西ドイツやオランダなどの半分以下ですが、その代わり様々な形のメディアが登場しています。情報の媒体としては、「活字」のほかに、テレ

ビ、カセットテープ、CD、ビデオ、CG、レックス、キャプテンシステム、電話など音声と画像の両面で目覚ましく拡大しました。図書館が扱う資料も、これからはそれらを取り込んで多様性を以て増大していくでしょう。画像化されたものは別として、音で直接耳に入ってくる情報でも、根本的には言葉として書き表せることに変わりなく、文字はやはり情報の原点に位置しています。しかし、情報収集の手段としての読書には、長所も短所もあります。探しやすい。確実性がある。長く安定して保存できる、など。その反面、速報性に欠ける。静かな空間と一定の連続的時間を要求する、など。静かに落ち着いて読書三昧に耽る、などというのは現代的感覚ではいささか「クライ」のでしょうか。とは言え、今でも生活の中で読書が必要なことも望ましいこともあるようです。そこで、場合によっては激しい知的欲求ともなって、あえてこの「現代的せわしなさ」に挑戦しようということにもなります。出来る限り素早くしかも適確に理解する術を編み出そうというわけです。それが、いわゆる速読術がこのごろ話題になっている理由でしょう。実は、この「術」と称される方法の中に、静の中の動という、読書の、本の利用の仕方の本質が現れていると思うのです。

この術のコツの一つは、脳波を α 波の状態にすることです。つまり眠っている状態のシータ波やデルタ波でも、考え過ぎのベータ波でもな

く、弛緩しながら集中しているアルファ波、つまり適度な活動状態におくこと。それから眼筋を訓練で強化して、行から行へ、ページからページへ眼球を素早く動かせるように鍛えること。これで視線がダイナミックになります。そして声読と同じくゆっくりした黙読からむしろ視読へ、即ち目で瞬間的に読み取っていくための直感力の養成。静止している字面の中に潜む、動的な構造をつかみ取る。だから、そのためには呼吸を整え、姿勢を正し、リラックスした状態で、しかも外のことに気を散らすことなく集中を持続し続けること。そうすると書かれている内容はイメージ化され、心の中で画像として躍り出すことになります。これをマスターすれば、文庫本一冊5分で読めるようになるということです。勿論、理解を深め、内容を十分に消化す

るには、その後で反復してじっくり考える時間も必要でしょう。

このコツが誰にでもすぐに行えるものかどうかは別にして、まず動の中に静を求め、その静の中に再び動を開始する、というダイナリズムは、どんなことであれ、持てる能力を十分に発揮して何事かをやり遂げようとする望ましい人間行動の原型に合致しているのではないのでしょうか。読書は、静の中に動を秘めた精神の活発な活動だと言えます。だとすれば、図書館はさしずめそのための道場だということになります。



学問は情熱

外科学教室 咲田雅一

私が大学を卒業した頃は大学紛争の真只中であつた。大学に機動隊が入り教授連が学生からつるし上げられ、校内はビラと立て看板とバリケードに埋もれていた。国家試験ボイコット、入局拒否、卒業試験ボイコット等で卒業は8月になった。真夏の暑い日に卒業証書だけをもらいに、カッターシャツにやはりネクタイだけはしめて大学に出かけた。学長と学生部長、事務職員と我々だけのさみしい卒業式だった。あれから今年で20年。卒後20周年の同窓会の幹事がまわってきた。20周年だから少し盛大にやろうかと、年始めに何人か集まってその計画を練った。

入局拒否、自主研修との事で大学の医局に入られず、友達4人と知人を頼って岡山の病院に出かけた。しばらくそこに居り紛争の沈静した頃、大学の医局に入局を申し出た。教室には空席がないからとの事で舞鶴へ。2年間国立舞鶴病院で過ごした後、憧れの大学の外科教室に戻った。主任教授が間島進教授で、当大学の附属病院院長である。

大学で新鮮にみえたのは研究室だった。机に

向かって論文を読み、paperを書き、そして動物実験をしている先輩がほんとうに偉そうにみえた。自分も彼らのように研究をしてみたいと切実に思った。学生時代は高校、大学を通じてラグビー部で過ごした。あまり勉強した記憶はなく、その反動で純粋にアカデミックな事に憧れたのかも知れぬ。丁度その数年前より組織培養が盛んに行なわれ、免疫学が注目され始めた頃であつた。

ある日、大学に戻って来た我々に間島教授は君たちはどんな研究をしたいのだと問われた。訳もわからず腫瘍免疫学のような事をしてみたいと胸をはって答えた。指導者もおらず全くの独学で、辞書を片手にとにかくその分野の英語のpaperを熱心によく読んだ。教室で誰も知らない知識だということが情熱をかきたててくれたように思う。

一つのpaperをよんでそのReferenceから次のpaperを捜して読み、ある人、あるGroupの論文に興味あればMedical indexで彼らの他の論文を捜して読んだ。新刊のCancer Research, J. Natl. Cancer Inst., J.

Immunol., Int. J. Cancer, Cancer Immunol. Immunother. etc. の題目にはきちんと目を通した。何か新しい事、何か自分たちでも出来そうな事はないかと図書館によく通った。そのうちに教室の助手になり、自分の下に毎年1人か2人が学位の研究のために来た。彼らと夜遅くまでよく実験した。全くの素人軍団で、実験方法も論文を読みながら、知らないことはいろんな所に聞きに歩いた。いつの間にか10年たち、彼らと作った博士論文が13編となった。その一編一編に彼らとの思い出が残っている。ネズミの世話をするより臨床をやりたいと思いつつ嫌いややっていた人もあったらと思う。なだめすかし、時には叱って、なんとか形をつけて教授の所へ持って行かせた。論文の出来不出来、苦労してやっと出来た論文、比較的 smooth に出来た論文、教授の喜んでくれた論文、あまり意図のわかってもらえなかった論文等種種あるが、なつかしい論文ばかりである。

これらの研究を通じて今思うことは、学問は螺旋階段のようなものであるということである。自分が考えついたと思った事も文献をひもけば必ず過去に誰かが考えている。これはおもしろいなと思った論文の reference をみると大抵その数年前にその original がある。対象により輪廻の間隔には差があっても、同じ思考、共通の思想が繰り返して出て来ているように思える。しかし同じ思考であっても、その学問的背景が少しずつ異なり、確実に少しずつ高い次元で discussion されている。同じ事が20年前に考えられ、その当時のテクニックを駆使して研究され、15年前にはその中に組織培養のテク

ニックが加えられ、10年前には免疫学が、5年前には biotechnology が導入されたという具合で、螺旋階段で同じ所をまわりながら少しずつ高くなっているという感じがする。人間の考え得ること、50年前も100年前もそれ程変わる筈はなく、ただ背景の進歩とともに出て来る結果が新しくなりつつあるように思える。私が若い人に何か言えるとするならば、アマデウスの中のサリエリ流に言えば、我々、唯々平々凡々たる凡人は、神に愛されたモーツァルトと同じではないという事をよく自覚することであろう。凡人が如何にひとりで瞑想しても所詮美しい melody がわく訳ではない。ある目的を抱けば、その対象に関して先人は如何に取り組んでいたかを知り、それを思考の base において、現在の最新の知識の中で考えなおす事が新しい知見への最も近道ではないかとも思う。そのためには、その対象に関する出来るだけ多くの文献に目を通し、それによって実験結果への見通しと確信を抱くことが大切かと思う。またこのようにして確信を持ち得れば、実験結果も不思議とその確信通りの結果を得るようである。さて、多少偉そうなことをいったが、それなら先生もさぞかし立派な新しい知見とやらを見いだされたのでしょねと皮肉られそうである。ところがさにあらず肝腎なところで、ある日突然情熱が失せてしまったのである。やはり学問にもっとも必要なのは情熱かもしれぬ。この失われた情熱を如何にして取り戻すかが今の私の最重要課題である。



解剖学考

解剖学教室 松浦忠夫

幼い頃におもちゃをバラバラにしたり、蝶の羽をむしったり、解剖と称して昆虫やカエルの内臓をひっぱり出したり、といった経験をおもちの方は少ないだろう。誰も物の構造を知

りたい、これの動く機構を調べたいという欲求をもったことは一度ならずあると思う。それを生物体について調べようというのが解剖学である。

「解剖」、広辞苑によると、生物体の一部または全部を解き開いて、その構造・各部の関連を探求すること、とあり、「解剖学」の項には、医学・生物学の基礎となる、とある。しかし、広辞苑のこの解説ではまだ不十分であり、形態的に探求する、または研究するとしてもらわなければならない。要するに解剖学とは、生物体（われわれの場合人体）を解き開き細分化することにより、内部の構造・機構を眼で見える形で（形態学的に）研究する学問である。細分化が進むと当然肉眼では見えなくなる。そこで解剖学は用いる手段により、肉眼解剖学、顕微解剖学（組織学）、顕微下解剖学（細胞学：電子顕微鏡を使用）に分けられる。また目的によっては必ずしもメスやハサミを必要としない場合もある。体表解剖学（美術解剖学）、X線解剖学などがそれであり、NMRを用いることも可能である。

観える、視覚的に判断しようということは解剖学の大きな強みである。「百聞は一見にしかず」という諺が雄弁にものがたっているように、観えるということは、一定の形をなしたものがそこに存在するということであり、言葉を尽さなくとも誰にも理解してもらえる。しかし、このことは同時に弱点にも通じる。観えない＝存在しない、とは限らないことである。実際には存在するのだが、たまたま観察した場所に無かった場合、存在したのが見落したのかまたは読みとりきれなかった場合、実際にそのようなものはそこに存在しない場合が考えられる。これらを一一つ確認してゆくのは相当困難な作業である。どのような研究分野でも Negative data の取扱いに注意を要することは同じだと思う。

解剖学は学生諸君にはあまり親密感をいだいてもらえる分野ではないようだ。現代の学生（若者）は視覚人間であり、あまり文章を読もうとしない（いつの時代でも同様だと思うが）と言われる。ならば解剖学は、まさに視覚学とでも言えると思うのだが、敬遠させているものとして、一つには解剖学は骨やら筋やら古くからわかりきったことをこねくりまわして骨董趣味的学問である、二つにどうでもいような所につけられた小難しい学名を覚えなければならない、といったことがあげられるだろう。しかし、解

剖学は決して古い学問ではない。現にわれわれが生きて運動できるのも細胞が活性を保ち、骨・筋が働いているからであり、自分がどのような機構で活動し得ているのかということに興味をもたない人はいないだろう。また現在もてはやされている細胞工学にしても細胞学の応用範囲の一つである。学名の問題にしても英語の単語や歴史的年号の丸暗記式に覚えこもうとすると、無味乾燥感をいだき、拒絶反応を示さなければならない原因がある。確かにわれわれの教え方に問題もあるだろうが、全て自分の身体に備わった部品である。自分の眼で見、触れることのできる部分も多い、先ずはそのような部分を自分の身体で確認しながら学名に慣れることをお奨めしたい。その際機能的な面も加味すると一層覚えるのが楽で正確になり、幅広い知識が得られ、同時に解剖学に親しみがわいてくると思う。たとえば大胸筋—上肢の内転運動—上腕骨と体幹を連絡している筋、腸絨毛—腸内腔の表面積の拡大—吸収面積の拡大—小腸、といった調子に。

最後に、広辞苑の解説ではもう一つ言い尽せてないものがある。解き開き放し、分解し放しでは真の解剖とはいえない。これではバラし屋、分解屋と呼ばれてもしかたがない。解剖学においては、細分化したものを最終的に再び組み立て直し（再構築し）一個の完成体に造り直してはじめて「解剖した」と言えるのである。この最終段階はあくまで思考上の作業であり、各個人の勉強の程度、認識の程度、さらには視点・考え方の方向によって再構築されたものも変わってくる。



青年期教育に関する一考

人文社会学教室 市川 哲

人間の子どもが弱いものとして生まれてくることに教育の可能性を洞察したルソー（Rousseau, J. J.）は、教育を受けることを子どもが人間になるための権利であると主張した。このことゆえに、子どもの心身の発達に即した教育的働きかけを要求したとあいまって、教育思想上の「子どもの発見」はルソーに帰せられている。

ところで、ルソーはおとなにあらざる子どもを発見したことにより、子どもとおとなとの境界に両者に属さない年齢カテゴリーとしての青年をも発見したことになる。この青年期は、ルソーの著わした『エミール』（1762年）によれば、嵐のごとき性の目覚めとともにおとずれ¹⁾。しかし、こころとからだの急激な変化に翻弄されるこの期の青年に求められるのは、流れに身をゆだねることではなく、それまでに培ってきたものを基に自らをおとなにする準備をすることである。

ここで彼らがめざすべきおとなを、特定の文化をもつ社会において相応の位置をしめ、労働を含む社会的役割を果たすことによってそのメンバーシップを獲得している存在である、と捉えておく。したがって、自らの性を自覚してそれにふさわしい役割を獲得していくこと、社会の文化的価値のなかから自らにふさわしいものを選択し、世界観、人生観を獲得していくこと、自らの適正と能力の洞察を通じてふさわしい職業を選択しまたその準備を進めていくこと、などがおとなへの準備として重要になるう。

エリクソン（Erikson, E. H.）はこのようなことから達成をアイデンティティの確立として青年期の発達課題に位置づけている。そしてこの期をアイデンティティを確立するための心理・社会的猶予期間（モラトリアム）と特徴づける²⁾。

わが国の場合、高等学校の進学率が90%を越え、専門学校を含むならば高卒以後引き続いて40%以上の青年が教育を受ける。モラトリアム期

を学校という環境のなかで過ごす青年が多いことが注目されよう。学校は青年がアイデンティティを確立する時空間的な場を提供しているのである。

激しく移り変わることが属性であるかのような現代社会では、自己確立は青年にとって決して容易な課題ではない。主体的に生きる訓練が欠けているものにとってはなおさらのことであろう。したがって「自分の適性はいかなるものか」、「自分の能力にあった職業は何か」、「自分はどんな仕事がしたいのか」という問いかけに明瞭な答えを見出せなかったり、あるいはそのような問いかけを避けた青年たちにとって、実社会から離れたモラトリアムに位置する学校（大学）はより住みやすい環境であり、そこにできるだけ長く留まりたいと願うものも増えている。

そうであるからといって大学教育は、「問いかけ」を青年に促したり、適切な解答を見出せるように援助したりすることによって、彼の人生に深くかかわることを求められているのであろうか。このことの答えは多様でありえるし、また各自の大学観にも深くかかわるため拙速に答えの一致を求めることは戒める必要がある。とはいえ進学目的があいまいな学生や大学生活を通じて目的を確認しそこなう学生が存在するならば、社会的な機関でもある大学が何らかの対応を求められることもまた確かであるだろう。

かつてトロウ（Trow, M. A.）は高等教育のユニバーサル化が「大学への不本意就学」ともいうべき状況を生み出すことを指摘した³⁾。大学進学に対する周囲や自己の期待、将来への功利的な予想、さらには多数のものが進学すればするほど進学しえなかったことが「ますます永続的な恥辱となり、精神や性格に何か特別の欠陥のあるしるしと目され、成人としての一切の活動や営みにとって致命的なハンディキャップ」となるのではないかという「圧力や状況」が青年を大学進学に駆り立てるといっているのである。

我が国の大学教育はユニバーサル段階にはない。しかしながらこのような「圧力や状況」は日常、感じられるところであり、もし意に染まぬ進学者が相当数いるとするならば大学教育は少なからぬ変容を迫られることになるろう。

このことについてトロウは不本意就学者の増加が大学教育に影響を与え、「学生は自ら学習への動機づけを持っているという前提は成立し難くなり、むしろ学生を動機づけてやる必要があるになった」⁴⁾という。

学習への動機づけの弱まりはその前提となり、また結果ともなる職業に関する自己確立の弱まりと密接な関連をもつと推察される。そうであるならば職業的アイデンティティの確立への働きかけを大学が行なってやる必要も生じると考えられるのである。

本学を含む教育目的が明瞭な大学の場合、そのようなことは不要であると思われるかもしれない。しかし比較的進学目的が明確であるはずの教員養成大学の場合⁵⁾、いささか資料が古いのではあるが、進学者の58.4%が入学後に進路変更を考えたり、必ずしも積極的に教職に就くことを希望しなかったというデータがある。

さらに筆者が87年度前期「教育学」受講生（データは四年生107名分、そのうち82.6%が鍼師・灸師の免許を両方とももつ）を対象に調査したところ進学前・進学後・さらには調査時点（7月）のどこかの段階で進路変更を考えたことのある学生は31.8%であった⁶⁾。

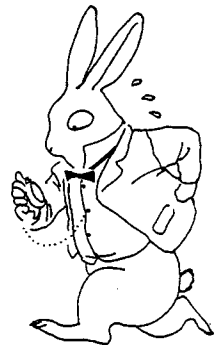
人生についての悩みはソクテラスやプラトン、ニーチェ、サルトルの専売ではなく、青年期を

彩る特徴である。そして青年期こそ大いに悩むことを許される時期でもある。

経済的な意味からも、また生きがいという観点からも職業が人生において重要な位置をしめる以上、職業に関する悩みもしかりである。悩んだすえに自らの方向に確信をもったとき、彼らは社会的にも期待される自己を確立していくであろう。人間は自らの生き方を自ら選択して生きていくものである。悩むということは人生に不可避の選択過程に着手したことを意味するのである。悩むのは青年自身であるが共有できる悩みについて共に解決を見出す努力をし続けたいものである。

<註>

- 1) J. J. ルソー『エミール』第4巻（邦訳多数あり）
- 2) E. H. エリクソン『自我同一性』、小比木啓吾訳編、誠信書房、1973、p.134.
- 3) M. トロウ『高学歴社会の大学』、天野郁夫・喜多村和之訳、東京大学出版、1976、p.30.
- 4) 同上、p.32.
- 5) 有本章「教職における予期的社会化」（大阪教育大学『教育学論集』第5号、1976）、p.86.
- 6) なお、入学時点で鍼灸師になることを決意していたものは73.2%であった。



西洋図書館小史（その七）

附属図書館 八木克彦

（承前）

他方、ケンブリッジ大学の図書館は15世紀初頭より存在し、ピューリタン革命の折に被害を蒙りましたが、1660年の王政復古ののちは王室の保護を得、王や枢機卿達からの寄贈、納本特権に基づく献本等によって徐々に財産を増やしてゆきました。特に1715年にはジョージI世から3万冊にのぼる豪華なコレクションを贈られ

ております。

現在の建物は1934年にロックフェラー基金の援助を得て新築されたものであり、有名なコレクションとしては、上記の王室文庫（Royal Library）のほか、6万冊に達するアクトン文庫（The Acton Library）、チャールス・ダーウィンの文庫（Darwin Library）、紀元1世紀の「十戒」のヘブライ版パピルス（The

Nash Papyrus)、1456年マインツ版のグーテンベルグ聖書等々があります。

いまひとつ、英国が世界に誇る大図書館があります。ロンドンの大英博物館図書館 (British Museum Library) です。

この図書館は言語学者で王室図書館司書であったリチャード・ベントリや医師ハンス・スローン卿等の提唱により、1753年特別に法律を制定して、スローン卿の蔵書 (約4万冊)、ロバート・コットン卿の文庫、オックスフォードのハーレイ伯のコレクションを集めて形成され、1757年にはヘンリーVII世時代からあった王室文庫をも併合し、1759年にロンドンのモンタギュハウスにおいて開設されました。

この図書館の特色は主として自然科学の立場に立ち、図書館であると同時に博物館であったことで、産業革命による経済発展を基盤にして国内資料はもとより、世界中の重要な文献の収集に努め、18世紀末には10万冊の蔵書を擁して当時すでに世界で最も重要な図書館となっております。

この図書館を語るとき、避けて通ることができないのはアントニオ・パニッチイ (Antonio Panizzi、後に Sir Anthony—1797~1879) のことです。彼はイタリアのモデナよりの政治亡命者で1831年にこの館に就職、1837年に刊本部の管理者、1856年には司書長となっており、今日各国で見られる国立図書館のアイデアを最初に提案した人物です。

彼の国立図書館の理念は、教育の促進、研究への援助、勉学の機会均等にあり、博物館図書館が1830年と1840年に公的調査の対象になったときを捉えてこの館の発展策を強く主張して多額の議会予算を獲得することに成功し、また著作権条約に基づく納本制度を実現させました。設備についても1857年には有名な円天井型大閲覧室をもつ荘大な建物を完成させたのです。この大閲覧室は数百人を収容することができ、壁面の周囲は3段になっていて各段を書架が取巻き、今日では最下段には2万冊の参考図書、上・中段を合せると6万冊の図書が配架されており、部屋中央の出納台はその周囲に目録棚を廻らし、また書庫には移動式両面書架を採用してスペースを節約しております。

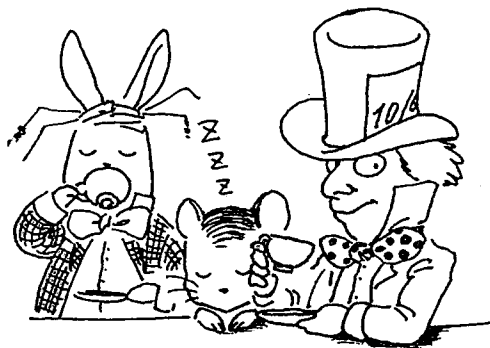
パニッチイはまた1839年には91ヶ条よりなる目録規則を作っています。このことは急激な蔵書増加に対して、その組織化がおくれ混乱していたことに起因するのですが、この目録規則に従っての実際の目録づくりは諸般の事情から1841年に“A”の部の完成をみただけで結局不成功に終わってしまいました。しかしながら規則そのものは近代目録法の神髄をふまえ、その後の英米目録法の出発点となったものでした。

大英博物館図書館では1813~19年の事務用目録 (前出の“A”目録) のあと1887年まで正式の目録は刊行されませんでした。パニッチイは事務用兼閲覧用の所謂シーフ・カタログ (Sheaf Catalogue) を1849年から作りはじめております。このカタログは1850年から1976年までの長期間使用され、今も刊本部図書館の閲覧室におかれ、1976年以前の受入資料の検索に役立っております。

このシーフカタログは1850年に150冊で出発したものが1880年には2,500冊にも脹れ上り、随分保管に苦労したということです。

パニッチイは1866年に退職しましたが、彼は大英博物館図書館を形造ったのみならず、他の国立図書館発展のためのルールを引いたものといえましょう。

大英博物館図書館は第二次大戦の折直撃弾を受けて10万冊の図書を失いましたが、1970年現在、850万冊の刊本と15万巻の写本、膨大な量の新聞・地図・楽譜、また14世紀から今日に至る絵画・版画の包括的なコレクションを擁して、研究者達に他に比類のない資料を提供しております。 (この項つづく)



近着東洋医学系図書一覽 (和書) (昭和62年1月~12月収蔵分)

古今養性録 上、下〔覆刻版〕	竹中通庵	自然と科学社	昭60	現代中医の癆治療法と中薬	郁仁存	東洋書店	昭61
萬安方(全)	梶原性全	科学書院	昭61	爲方契矩 影印十卷十冊	平野重誠草稿	燎原書店	昭50
頓醫抄(全)	梶原性全	科学書院	昭61	症状による中医診断と治療 上、下	趙金鐸主編	燎原書店	昭62
鍼灸治療室 第5集	池田太喜男	医道の日本社	昭61	刺針療法	国安厚臣	国安厚臣	昭57
近世漢方治験選集 13・別冊	安井廣迪編集・解説	名著出版	昭61	医心方と指圧療法 一温古創新の指圧療法一	井沢正	東京書館	昭58
カラーグラフィック皮膚病の漢方治療	中島一、谿忠人	広川書店	昭61	かんたんツボ図鑑 一川柳ですらすらわかる一	青柳修道	主婦の友社	昭62
開業鍼灸師のための診察法と治療法 3	出端昭男	医道の日本社	昭61	鍼灸臨床問診・診察ハンドブック	出端昭男	医道の日本社	昭62
最新鍼灸治療学 上、下	木下晴都	医道の日本社	昭61	医家のための痛みのハリ治療	高岡松雄	医道の日本社	昭60
黄帝内経末病を治す医学 教科書編	柴崎東洋医学原典会編	燎原書店	昭62	漢方マニュアル	塚本祐壯他	南江堂	昭61
黄帝内経末病を治す医学 柴崎保三論文集	柴崎東洋医学原典会編	燎原書店	昭62	中医産婦人科の臨床応用	黒竜江中医学院主編	雄渾社	昭61
意訳黄帝内経太素 第1~3巻	小曾戸丈夫	築地書館	昭62	東洋医学マニュアル 一鍼灸・整体一	池田研二	朝日ソノラマ	昭61
中医臨床講座 (2)、(3)	神戸中医学研究会編訳	燎原書店	昭59	荒木正胤の暮らしの漢方	荒木ひろし編	柏樹社	昭61
図解鍼灸臨床手技の実際	尾崎昭弘	医歯薬出版	昭62	東洋医学の科学的実証	科学技術庁編	薬業時報社	昭61
臨床中医学	三沢法蔵訳編	自然社	昭56	正奇経統合理論とその臨床	山下詢	医歯薬出版	昭62
男性病の漢方治療	李家振・龍国栄編	自然社	昭62	針灸集錦 下巻	鄭魁山編著	自然社	昭59
「証・経穴の科学的実証及び生薬資源の確保に関する研究」研究成果報告書 昭和61年3月		科学技術庁	昭61	図説AKのテクニク	脇山得行	エンタプライズ	昭62
医家のための痛みのハリ治療	高岡松雄	医道の日本社	昭56	東洋医学入門 (からだの科学選書)	大塚恭男	日本評論社	昭59
Proceedings of the 4th international Congress of Oriental Medicine 京都 1985. 10月		京都 1985. 10月	昭61	カイロプラクティック概論	鈴木正教	谷口書店	昭62
あん摩・マッサージ、指圧師、はり師、きゅう師 資格試験問題解答集 基礎編	桜雲会		昭54	難経解説	南京中医学院医経教研組編	東洋学術出版社	昭62
あん摩・マッサージ、指圧師、はり師、きゅう師 資格試験問題解答集 臨床編	桜雲会		昭55	皮膚科の漢方治療 一弁証と臨床一	中島一	現代出版プランニング	昭62
瘀血研究 一第2回瘀血総合科学研究会講演記録集一	瘀血総合科学研究会編	自然社	昭58	本草書の研究	渡辺幸三	武田科学振興財団	昭62
瘀血研究 一第3回瘀血総合科学研究会講演記録集一	瘀血総合科学研究会編	自然社	昭60	S S P療法	兵頭正義・北出利勝	S S P療法研究会	昭62
経穴集成 一経穴部位の文献抜粋一	日本経穴委員会調査部編	日本経穴委員会	昭62	鍼灸古典入門 一中国伝統医学への招待一	丸山敏秋	思文閣	昭62
中国医学の誕生 (東洋叢書2)	東京大学出版会	東京大学出版会	昭62	中医学入門 一病理学からみた中医学一	匡調元	金原出版	昭62

あとがき

附属病院の開設似来、看護婦さんや臨床検査関係の人々、それに研修鍼灸師諸氏の図書館利用が目立っています。蔵書数は製本雑誌をいれて3万冊に達しました。在学生諸君もテストやレポートの時だけでなく、日常もっともっと利用してほしいものです。

今回も、短期間に原稿をお寄せ頂いた先生方に深く感謝いたしております。(K. Y.)

カット図; 63年3月卒業・奥井浩之君